

NPOアジアの誇り・プレアビヒア日本協会10周年記念講演会

プレアビヒアの 今までとこれから

講演集

2019
October



主催：特定非営利活動法人 アジアの誇り・プレアビヒア日本協会

共催：一般社団法人 日本旅行作家協会 カンボジアグループ

後援：一般社団法人 日本旅行作家協会

後援：JICA地球ひろば

プログラム



特定非営利活動法人アジアの誇り・プリアビヒア日本協会が2009年4月16日に設立され、2019年4月16日にて10周年となりました。プリアビヒア寺院が世界文化遺産に登録された2008年7月を契機に日本から世界文化遺産を支援しようと有志が立ち上げ、あっという間に10年が経過しました。その間にはカンボジア・タイの衝突もありましたが、2012年7月の和解撤兵を経て、今では世界各国から毎年数万人が訪れる地域に変貌しました。

「PVAJ10周年記念講演会 プリアビヒアの今までとこれから」

日 時：2019年10月5日（土曜日）13:00-16:30
場 所：JICA地球ひろば、セミナールーム600
（東京都新宿区市谷本村町10-5（JICA市ヶ谷ビル内））
定 員：80名

プログラム

13:00 開 場

13:30-13:40 開会挨拶 理事長 森田徳忠

13:40-13:50 共催挨拶 日本旅行作家協会

副会長 小谷明

13:50-14:50 世界遺産プリアビヒア寺院とPVAJの活動

前理事長 加藤節夫

14:50-15:10 写真で語る世界遺産・プリアビヒア寺院

写真家 奥村浩司

15:10-15:20 休 憩

15:20-16:30 記念講演カンボジア内戦と今

（これからのプリアビヒア） 理事長 森田徳忠

16:30 閉会挨拶 副理事長 伊藤一正

皆様には日頃からブレアビヒアのエコ・ビレッジ開発のためにご支援を頂き有難うございます。お蔭さまできょう当会誕生10周年記念の会を設けることができました。ここにお集まりいただいた方々の中には、当会誕生の頃から暖かく、そして辛抱強くEco Villageの成長を見守ってくださった方々もおられます。また新しい視点から我々のプロジェクトをサポートして下さっている方々もおられます。

当会が発足準備をしている時のことですが“NGOは普通設立後3年もしないうちに解散する。長くて5年、それより先に進むケースはあまりない。ブレアビヒアのProjectは面白そうですね。是非長く続けてほしい”という現実を教えてもらいました。そういったNGOの世界で我々が今日10周年記念を開催できるのは、ほかでもない皆様のお蔭です。

私達は当初ブレアビヒア寺院の復旧・整備そのものをお手伝い出来るものと思いこんでおりました。そんな時UNESCO世界遺産委員会の元Chairmanをしておられたベシアウス氏から「世界遺産を長く守っていくのは、普通そこにある街や村の役目です。ところがブレアビヒアの場合それがない。内戦がそうしたのです。出来たばかりの”エコビレッジが立派なコミュニティに成長する目鼻が付くまで、日本人グループが面倒を見てくれないか」と要請されました。いわばUNESCOのお声がかかりによるもので、カンボジア側もそれに答えるための必要措置を取ってくれました。

当会設立のお披露目会で私が皆さまに何を伝えしたか、いささか頼りない記憶に想像を交えて申しあげれば、おそらく以下のような事だったように思います。

◎ 国はおよそその大小、にかかわらず、また富める国か、貧乏な国かということとは関係なく、自分の信念を持ち、そして何らかの格好で近隣諸国、あるいは国際社会に貢献する、つまりその存在を何らかの形で国際社会に示すことが出来る、そういった国になって欲しい。

◎ フンセン首相はGMSプロジェクトとの関連で私に次のように言っています…「このプロジェクトが実施された暁には私は国境線に防衛部隊を置く必要がなくなる。これによって国は防衛費を大幅に削減できる。そこでセーブした予算を、これまでの戦いで大変苦勞を掛けた貧困農民層の生活向上、さらに将来国を担う若者達の人材開発のために使うことが出来る。ついこの前まで再前線戦で指揮をとっていた若干39歳の首相の言葉である。毎日死と直面し、その恐ろしさや、平和を築くことの重要さをいやと云う程味わってきた農村出身者の声としてごく自然に聞くことができる。

このような指導者と最貧国の最後尾からスタートした “カンボジアの今日と明日” について、後程お話し申し上げたいとおもっております。私見として。私がどう見ているか、かいつまんでお話しもうしあげます。

2019. 10. 05 森田徳忠

PVAJ 10年間の事業報告

平成21年4月16日 から 平成22年3月31日まで

①平成21年度、総合計画の土台となる現地調査を2度にわたり当会の支援のもと東京大学とプノンベン大学が共同で実施し、今夏にも調査に基づく開発計画の基本プランが発表される予定である。

②発足以来日本ではまだ十分に知られていないカンボジア世界遺産プレアビヒア寺院とそのプロジェクトの価値を広く紹介し、会員募集等会の基盤づくりをするため、在日カンボジア留学生と交流し、講演会・写真展を開催、ホームページ・VTRを作成し、現地へのスタディツアーを行った。



平成22年4月1日 から 平成23年3月31日まで

平成22年度は遺跡の保存・復興計画と共に、車の両輪となって進められる周辺地域開発の基本構想を作成・提案するなど全体計画の基盤づくりを支援した。「世界遺産を守るために持続可能な地域社会をつくる」この基本構想に沿って現地での最優先の課題となっている個々の事業の実施について、現地関係者と協議し実行計画を作成するなど将来に向けて大変意味のある年となった。

①遺跡周辺では、政府による土地利用規制のためのゾーニングが行われ、遺跡を核とする約20KM四方を自然環境保護地域に設定すると共に、新たにエコビレッジを造成し、地域住民の移転を進めている。この開発の基盤となっているのが当会の支援のもと東京大学・プノンベン大学の共同チームの作成・提案した開発基本構想である。

②このエコビレッジ内に当会は12haの土地の無償貸与が認められ、今後のモデルともなる開発計画の作成準備に入ったほか、現地での最優先の課題となっている地域の子供達や住民への文化・環境教育、有機農業普及、植林等の事業について民間助成金を申請すると共に、現地関係者と実施準備を行った。

③講演会、ホームページなどを通じ世界遺産やプロジェクトを広く紹介し、活動への参画を呼びかけた。今年度はカンボジア留学生との交流に加え、新たに日本の学生グループが参画し現地住民との交流活動が始まった。

平成23年4月1日 から 平成24年3月31日まで

平成23年度はプレアビヒア・エコビレッジにおける現地活動が始まった。世界遺産を守る活動には、地元住民の参画が不可欠であり、かれらの尊厳、コミュニティの形成が重要である。そのため住民の生活改善を図る農村開発、小学生への世界文化遺産教育の2つの支援活動が先ず行われた。

(1) 農村開発支援活動

最優先となる食の確保を単なる食糧支援では無く、世界遺産を守る活動を担う余裕を持てる生活改善、それを可能にする農業・オーガニック農業の導入・普及を図った。

①エコビレッジ内モデル農園づくり

カンボジアNGO・CEDACに委託、先ず2ヶ所の圃場から井戸の設置と技術支援を行い、収穫の増加等の成果をもとに、現段階でモデル農園は5ヶ所に増加している。

②オーガニック農業導入、タイ大賀農場への研修生派遣

大賀昌氏の指導を基盤に、国際的に通用するオーガニック農業を目指し、6名の研修生派遣。40日に及ぶ研修後帰国した研修生は、エコビレッジ試験農場、モデル農園で直ちに実践活動に入った。

(2) 世界文化遺産・環境保全教育

文化遺産と周辺自然環境保全、地域住民が共生関係にあることを理解し、自ら守り、育てると言う使命を先ず子どもたちに託すことから始めた。

①地元唯一の教育機関 - 小学校で学校生活における清潔・整頓等生活習慣教育を実施した。

教材配付、校内清掃、スローガン看板設置、ゴミ分別小屋建設、園芸活動等

②世界遺産寺院での小学生写生大会開催 - 世界遺産と森を守るピラ配布

これらの活動は民間団体の助成金、大賀昌氏・農園スタッフ、文具メーカー等多くの支援を受けて行われた。特にオーガニック農業研修生はカンボジア・オーガニック農業の先駆者となる意気込みを持っており今後が期待される。また小学生写生大会は、日本の学生の活躍を地元メディアが大きく報道する等好評だった。

(3) カンボジア政府から、エコビレッジ内12ha (36,000坪) の土地が正式に当会へ貸与される運びとなった。この土地はエコビレッジのメイン道路に面しており、今後の開発の重要なポイントとなることから、周辺部を含め設計に着手し、今期予定していた建物(エコハウス)建築の準備に入った。

(4) 大学生グループによる現地活動は上記写生大会の他、古着等の物資支援、エコビレッジ住民の生活調査、家畜調査など住民との交流を深め着実に成果を上げている。

(5) 当会の支援のもと行われた東大チームにより作成されたオリエンテーション・プランはカンボジア政府等関係者の高い評価を受け、同地区の開発基本構想に組み込まれる準備に入った。

(6) 今後の活動の大きな柱となる植樹活動の調査・準備が行われた。次期開催のエコビレッジ植樹祭準備を行った。

(7) 震災復興支援チャリティ音楽会、当会会長森田徳忠氏の写真集による募金活動を支援した。

(8) 会員増強活動はWSF(Women's Swim Festival)でのチラシ配布等継続して実施しており、3月末の会員数は正会員17名、賛助会員47名(うち団体会員2名)計66名となり、前年度対比29名の増加となった。

平成24年4月1日 から 平成25年3月31日まで

平成24年7月、プレアビヒア近隣の国境地域からカンボジア、タイ両国軍隊が撤退した。カンボジア軍の撤退式には民間団体では現地で唯一活動をしている当会が招待され、カンボジア政府より「苦しい時にも活動を継続してくれた」との謝意表明を受けた。国境問題の解決は兎も角、両国の紛争がプレアビヒアへの公的機関の支援を遠ざけていることから、今後両国関係の更なる改善を期待している。カンボジア政府は現地道路整備、古代灌漑池の採掘、博物館の開館準備など着々と進め、エコ村では現在3千家族ほどが生活を始めている。

当会は「世界遺産プレアビヒア寺院を囲む大自然を守る担い手は、住民と彼らのコミュニティ」と認識し、彼ら自らの生活改善・収入の増加・ゆとりある生活実現のための農村開

発支援、そして次代を背負う子どもたちへの教育支援を重点に活動を進めている。具体的な事業活動は、以下の通り資金調達等多くの問題点解決に至らず、遺憾ながら年初の目標を達成出来なかった。しかし会の活動の方向や目標、課題などが見えてきた意味ある年になったと考えている。

(1) 植樹活動

エコ村第1回植樹祭を6月に開催した。この事業は緑の募金公募事業として行われたが、特筆すべきは、樹を植える子どもたちの笑顔が、一緒に樹を植える親たちの笑顔となったことである。各地からの移住で、それまで殆ど顔も知らなかった村人達が、一堂に会し笑顔を共有することが今後のエコ村の在り方に大きな意味があると考えている。また植樹に参加した小学生は園芸活動を始めており、更に学校周辺に植えた樹の下草刈りや水遣りも自ら行う等の活動に繋がっている。

村人達が、一堂に会し笑顔を共有することが今後のエコ村の在り方に大きな意味があると考えている。また植樹に参加した小学生は園芸活動を始めており、更に学校周辺に植えた樹の下草刈りや水遣りも自ら行う等の活動に繋がっている。

植樹祭は1日と4日の2回に亘り実施。エコ村の児童・住民を主役に、アンコール大学生、当会の学生隊が加わり約250名の参加者が10カ所（総植樹面積約6ha）に40樹種、合計2,444本を植樹した。

(2) 農村開発支援活動

農業技術普及のためのモデル農圃は、当初の2つから5つとなり収穫も増加している。これからエコ村の中心事業となるオーガニック農業の導入・普及活動は、タイ大賀農場で学んだ研修生たちが、エコ村で野菜栽培やEM（有用微生物）液の培養・配布など実践活動を行っている。収入増を目的に、ひまわり生産導入や稲の実験栽培を行い、養鶏等家畜飼育の調査も始めている。今後は井戸掘削や家畜飼育等日に見える事業実施により住民への浸透を図る段階に入ったと考えている。

(3) 世界文化遺産・生活環境改善教育

小学校生徒への生活環境改善教育は、校長・教員の努力により小学校およびその周辺は以前と比べ格段に清潔になってきている。

①エコ村小学校で、学校生活における清潔・整頓等生活習慣教育を継続実施し、教材配付、校内清掃、ゴミ分別等が行われている。教室不足から設置したゴミ集積小屋は現在教室として利用されているが、小学校では自主的に園芸活動が始まる等の成果があった。

②世界文化遺産教育は、寺院遺跡の素晴らしさを知って貰うため、小学生写生大会を前年に続き開催した。小学生の作品向上は顕著で、小学校・地元関係者から活動継続を要請されている。

当会学生隊は小学校5、6年生を対象に世界遺産寺院で8月と2月写生大会を実施した。画材は日本企業から支援提供されており、学生隊はこの手配から、安全確認の事前現場調査、小学生の引率・指導、表彰などの活動を行い、地元メディアの賞賛を受けた。

現場調査、小学生の引率・指導、表彰などの活動を行い、地元メディアの賞賛を受けた。

(4) 学生隊の現地活動は、写生大会の他、古着等の物資支援、エコ村住民の生活調査、現地マーケットの調査や小学生との遊戯等を通じ住民との交流を着実に深めている。

(5) 当会会長森田徳忠の写真展「アジアに生きて40年写真展」を開催し、プレアビヒアにおける活動の紹介と会員増強活動を行った。

(6) 会員増強活動はWSF (Women's Swim Festival) でのチラシ配布等継続実施し、3月末会員数は正会員19名、賛助会員68名 (うち団体2名) 計87名となり、前年対比21名の増加となった。

平成26年4月1日 から 平成27年3月31日まで

プレアビヒア寺院は、2012年7月タイ・カンボジア両国軍隊が寺院地域から撤退して以降、平穏な状態が続いている。

昨年2014年12月初め、ユネスコ国際委員会ICCがカンボジア・シェムリアップにて開催され、日本、アメリカ、中国、インド、等7ヶ国にタイ、カンボジア両国が参加し、プレアビヒア寺院の復興支援を決定した。(日本は日本大使、当会森田会長はユネスコの要請にてオブザーバーとして出席) 両国が出席した公式の国際会議の場で寺院の復興支援を決議したことにより、ここ数年のプレアビヒアをめぐる両国紛争は落着いた。更に同12月20日タイ・バンコックで開催されたメコン川拡大流域首脳会議では、両国外相が今後の協力を約し握手する様子がTV報道されこれを裏付けている。

また、これに先立ち12月2日、日本外務省は渡航情報を改定し、プレアビヒア地域をカンボジア全域と同じ「十分注意してください」という危険情報の中でも1番下の安全サイドに引き下げた。

このように、プレアビヒアをめぐる国際環境は急速に改善されつつあり、各国が寺院復興支援に着手できる環境が整って来たと言える。

今年度当会の事業活動は以下の通りであるが、現地での活動推進のため検討した現地駐在員の派遣は、諸般の事情により実現出来なかった。しかし、植樹活動は3年目も継続して進めており、12haの土地では小規模ながら農業支援活動に着手している。このような中、学生隊の活動が共同通信社の記事となり、全国地方各紙に掲載され反響を呼んだ。また、第11回JICAグローバル教育コンクールで、第9次学生隊の応募写真が団体奨励賞を受賞し、これを記念して3月に行った報告会は沢山の皆様のご参加をいただき好評だった。また、こうした環境改善を踏まえ、事業推進のための体制強化を図るべく、認定NPOの資格取得を準備し、3月に東京都へ仮認定を申請した。現在審査中であり、資格取得後は税務上の恩典を受けられることから、今後の事業活動を大きく推進すると期待される。

(1) 植樹活動

今年度が3年目となる植樹活動は、現地住民が植樹するだけでなく、その後も苗木の養生生育を持続して行うことが重要と認識して行われた。このため住民が日頃通える植樹地域に、やがて果実が実ることを期待出来るような樹種の選定を行っており、これに合わせ井戸の掘削や道路補修、用具倉庫等の環境整備を行った。

(2) 農村支援活動

当会が貸与されている12haの土地を、モデル農場としての役割も果たすよう整備を開始した。植樹地域にも選定し、苗木の養生と共に近隣住民や子供たちが日ごろ作業を行う場所となることを意図しており、次年度以降の具体的な活動につながる準備をおこなった。

(3) 教育支援活動

今年度も学生隊は9次、10次と2度にわたる派遣を実施。現地住民の生活調査や小学校での交流活動を継続して行った。特に毎年行われている写生大会では、小学生の作品が第45回世界児童画展で見事銀賞を受賞した。当初鉛筆で線を描くだけだった子どもたち

の笑顔が住民の希望につながりコミュニティ醸成に寄与していると高く評価されている。

(4) 広報活動

ホームページの更新やニュースレターの発行等が進まず、会の活動を皆さまの活動というように身近に感じて頂けなかったことを反省し、次年度はより積極的な広報活動を実施することを期している。

平成27年4月1日 から 平成28年3月31日まで

世界遺産プレアビヒア寺院とその周辺をめぐる環境は、2012年7月タイ・カンボジア両軍撤退以降、平穏な状態が続いている。また、2014年12月の日本外務省による渡航情報改訂によってカンボジア全域と同ランクとなったことを受けて、当協会は本年度を「プレアビヒア元年」と位置づけ、本格的な開発事業渡航情報改訂によってカンボジア全域と同ランクとなったことを受けて、当協会は本年度を「プレアビヒア元年」と位置づけ、本格的な開発事業に取り組んだ。なお、そのために多くの会員が会議に参加できるように千代田区内に事務所を設けた。

まず、2015年9月27日、臨時総会を開催し、協会の新体制を構築することの承認を得た。この新体制はプレアビヒアインターナショナル設立を推進することを目的とし、旧会長職を廃止して、旧会長を理事長に配置するものである。

さらに、これは、2014年12月、ユネスコ国際委員会ICCが開催され、日本、アメリカ、中国、インド、等7ヶ国とタイ、カンボジア両国が参加し、プレアビヒア寺院の復興支援を決定したのを受けた新体制という側面もある。昨年度・本年度とも当会新理事長（旧会長）は駐カンボジア日本大使とともにこの会議に招請され、会議において重要な役割を果たしている。

また、本格的な開発に向けて、JICAをはじめとした諸機関・財団と開発計画の立案やその裏付けとなる資金に関する協議に入った。

今年度当会活動については以下に示すが、現地での活動推進のための現地駐在員の派遣は未だ実現していない。しかし、協会関係者を中心とした現地訪問の回数は前年をはるかに超えており、エコパーク（かつて「12haの土地」と呼んでいた土地）を中心に急速に開発が進んだ。これには国土緑化機構からの4年目の助成金も大きく貢献している。

さらに、2015年1月のJICAグローバル教育コンクールにおける特別表彰を受けた当協会傘下の学生隊は多くの学生の参加を得て、活発な現地活動を行った。とくに、2016年2月に遣した第12次学生隊は、参加学生34名という大派遣団となり、現地住民からの暖かい歓迎を受けた。また、2016年2月末には当協会員竹宇治氏を中心とするグループの寄付によってエコパーク内に新たな井戸も設置され、エコパークの一層の発展の基礎が作られた。

(1) 植樹活動

今年度が4年目となる植樹活動は、活着率向上を目指して、「実のなる木」「花の咲く木」へと植樹樹木を変更したことが功を奏し、現地住民から歓迎され、エコパークを中心に着実に成果を上げつつある。また、これに付随したエコパーク内施設（井戸を含む）の整備が進み、農業を生活の基盤としてきた地域住民の生活向上にも寄与できるようになった。

(2) 農村支援活動

カンボジア政府から当協会が貸与されているエコパークは、パイロットファームとして

の役割を果たしつつある。また、農民の自立、とくに女性や子ども達が豊かに暮らせるような農村支援活動として立案した「プレアビヒア地域の観光セクター人材開発」計画は愛・地球博成果継承財団から多額の助成金を受けられることが決定し、来年度から本格的に活動することとなった。

(3) 教育支援活動

今年度、第11次隊（2015年8月～9月）と第12次隊（2016年2月）学生隊を派遣した。従来通り、現地住民の生活調査や小学校での交流活動を継続して行ったが、本年度の訪問において、特筆すべきことは、第11次隊において伊藤会員寄贈の電子ピアノによる音楽教育活動と第12次隊が「地域の美化活動」を現地小学生とともに実施したことである。これらは現地住民から高評価を得たばかりか、活動中に熱烈な声援を得た。学生隊員は、この活動を今後も重要な活動項目として位置づけ、継続して実施していくための準備に入っている。

(4) 会員増強活動（含むホームページ刷新）

会員増強活動の一環であると同時に当協会のイメージアップを目的としてHPを刷新した。HPには 会員各位の交流や、協会の情報開示がおこなえるよう工夫を加え、さらに、現地の状況を会員のみならず社会一般に紹介できるようなコーナーを設けた。大変好評を博していると考えている。

平成28年4月1日から 平成29年3月31日まで

当協会は昨年度を「プレアビヒア元年」と位置づけ、本格的な開発事業に取り組んだ。本年度はその2年目として著しい事業発展を目指し、大きな成果を上げた。この背景には、世界遺産プレアビヒア寺院とその周辺をめぐる環境が、2012年7月タイ・カンボジア両軍撤退以来、平穏な状態が続いていることにある。また、2014年12月の日本外務省による渡航情報改訂によってカンボジア全域と同ランクとなったことを受けて、協会関係者や傘下学生隊の渡航が容易になったことも見逃せない。

さらに、千代田区内に設けた事務所は連絡事務所としての機能のみならず、各種会議に利用され、協会活動の中心として重要性を増しつつあることにも事業発展の要因が見られる。今年度の事業展開で重要な資金となったのは、一般財団法人地球文化産業研究所「愛・地球博成果継承発展助成事業」（以下「愛・地球博」）と三菱UFJ国際財団からの助成金である。また、国土緑化推進機構からの助成金も継続されている。これらの事業展開の中で、エコ村地区農民をタイ国Harmony Life Organic Farm（以下「大賀農場」）へ研修団として派遣することができ、大きな成果を上げた。

これらの事業展開の中で、エコ村地区農民をタイ国Harmony Life Organic Farm（以下「大賀農場」）へ研修団として派遣することができ、大きな成果を上げた。同時に、カンボジア政府機構のNational Authority for Preah Vihear（以下「オーソリティー」）幹部を日本に招聘することができた。これらの活動によって、当協会と地域住民やオーソリティーとの連携が将来に渡って確保されたものと確信する。また、地域人材開発として行われた観光開発関連の教材開発事業は、試験的事業ではあったが、地域住民や教育関係者、オーソリティーから高い評価を受け、今後の発展が期待される。一方、三菱UFJ国際財団は学生隊の報告会に関係者を派遣され、当協会と傘下学生隊の事業を高く評価するコメントを残された。

本年度の活動で最も重要なことは、JICAと外務省国際協力局民間援助連携室（NPO連携課）

との交渉を通じて、カンボジア国内に当協会傘下の現地NGO法人設立への動きが本格化したことである。すでにほぼ設立準備は完了し、新年度早々にも設立される運びである。この動きを受けて、JICAをはじめとした諸機関・財団との協議を推進し、活動の裏付けとなる資金を得て、プレアビヒア開発が著しく進展することが期待される。その基礎を本年度の活動において構築することができた。

長く懸案となってきた活動推進のための現地駐在員の派遣は未だ実現していないが、現地での当協会活動協力者は一段と厚みを増しており、これら協会関係者が現地活動の中心となり、将来の現地スタッフとして育ちつつある。

さらに、2016年秋、当協会理事長森田徳忠氏は当協会のこれまでの活動を含むカンボジア王国への貢献が高く評価され、勲章を受章したことは当協会にとって特記すべきことである。

(1) 植樹活動

6年目となる植樹活動は、エコパークを中心に着実に成果を上げつつある。やる気元気クリニック院長の寄贈による井戸は開発の重要な起点となっている。

(2) 農村支援活動

人賀農場への研修に参加した農民が中心となってエコパークは地域のパイロットファームとしての役割を強めつつある。また、農民の自立、とくに女性や子ども達が豊かに暮らせるような農村支援活動として立案し、愛・地球博成果継承財団から助成を受けた「プレアビヒア地域の観光セクター人材開発」事業は大きな成果をあげ、さらなる発展が期待されている。

(3) 教育支援活動

今年度、第14次隊（2016年8月～9月）と第15次隊（2017年2月）学生隊を派遣した。本年度はブノンペンからの学生や隣国ベトナム、ホーチミン市からの学生も加わり、国際色を強めつつある。昨年高い評価を得た「地域の美化活動」は現地小学生とともに継続実施され、重要な活動として定着しつつある。

(4) 会員増強活動

会員増強活動と当協会のイメージアップのために、ホームページ担当理事を置き、ホームページ更新を積極的に行っていくこととなった。

平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで

ユネスコによる世界遺産プレアビヒア寺院の維持保全にかかわる活動は世界遺産指定（2008年7月）から9カ年を経過し、積極的な協力活動が世界各国により開始される見通しとなってきた。当協会は2009年8月の設立以来、カンボジア政府と協力し世界遺産地域の住民生活の確立と維持に向けた活動を継続し、本年8月にはカンボジア外務省と地域開発に関するMOUを締結し国際NGOとしての活動を受け入れられ現地に法人としての設立が許可された。これを受け、2017年10月には、現地にNGO事務所も準備され、ますます活動が拡大することとなった。

2017年9月及び2018年3月にはユネスコ国際委員会ICCがシエムリアップにて開催され、日本、アメリカ、中国、インド、等7ヶ国とタイ、カンボジア両国が参加しプレアビヒア寺院の復興支援が議論された。当協会はICC会議開催の度に理事長や副理事長、監事等が駐カンボジア日本大使等とともに招請され、会議において地域開発の進捗や

方針などを報告し世界遺産の維持保全に重要な役割を果たしてきている。また本格的な地域開発に向け、JICAをはじめとした諸機関・財団と開発計画の立案や実施に向けた支援について協議を実施した。

さらに、当協会の学生隊は、16次と17次隊を現地に派遣し、地域の小学生との写生大会、運動会を開催し、また地域住民への農業支援を実施した。

本年度の活動で特筆すべき事は、カンボジア政府から現地NGO法人としての活動が認定され、すでに4名のメンバーを確保するに到った事がある。今後、各種事業が進捗するにつれ、現地NGO組織では数十名規模の組織化を予定する事となり、プレアビヒア開発が著しく進展することが期待される。

(1) 植樹活動

今年度が7年目となる植樹活動は、活着率向上を目指した、「実のなる木」「花の咲く木」へと植樹樹木を変更したことの効果が顕著にあらわれ、エコパークを中心に着実に成果が出てきている。これに付随したエコパーク内施設（井戸を含む）の整備も進み、農業を生活の基盤としてきた地域住民の生活向上にも大きく寄与できるようになった。

(2) 農村支援活動

カンボジア政府から当協会に貸与されているエコパーク（12haの土地）では、地域でのパイロットファームとしての役割を果たすため、オーガニック農業の試行に向け、ニワトリの試験育成と堆肥の確保、乾期の水資源確保のための小型溜池の整備が進み、安定した農業展開の見通しができつつある。当協会は地域住民（農民）の自立を目指し、新規開拓地域が豊かに暮らせるような農村支援活動を目指しており、その一環として、外務省NGO等活動支援事業の導入、JICA草の根事業の導入に向け、NGO等向け事業マネジメント研修への参加を通し、JICA参加の元に現地状況調査を実施し、来年度からの本格的な活動の基礎を確保するに至った。

(3) 教育支援活動

今年度、第16次隊（2017年8月～9月）と第17次隊（2018年2月）学生隊を現地に派遣し。従来通り、現地住民の生活調査や小学校での交流活動を継続して実施した。これらの活動は、日本からの派遣学生の自立的な国際協力の経験を積むのみならず、現地小学生は、将来の国際交流の貴重な経験でもあり、エコパークを地域共有の開発モデルケースとして自覚するに至っている。そして、これらの活動は現地住民から高評価を得ており、活動中にも熱烈な声援を得ている。協会では、さらなる拡大を目指し、次年度以降の活動を、広く全国の学校に拡大する事を予定している。

(4) 会員増強活動（含むホームページ刷新）

会員増強活動と同時に当協会のイメージアップを目的として、HPやフェイスブック、ツイッターなどでも情報発信を積極的に実施。HPには会員各位の交流や、協会の情報開示が行えるよう工夫を加え、さらに、現地の状況を会員のみならず社会一般にも紹介できるようなコーナーを設け、好評を博している。来年度には、協会事業の拡大にともない、さらなる広報体制の拡充と広報手法の拡大を予定している。

平成30年4月1日から平成31年3月31日

ユネスコによる世界文化遺産プレアビヒア寺院の維持保全にかかわる活動は、世界遺産指定(2008年7月)から10カ年を経過し、アメリカが参道補修への取組みを表明し開始するな

ど、関係各国の積極的な協力活動が始まった。当協会も2009年4月の設立以来、カンボジア政府と協力し世界文化遺産地域の住民生活の自立に向けた支援活動を継続している。本年度、現地エコビレッジ地区は、幹線道路の拡張が行われ、送電線が配備され、一気に近代化に向かった変化が押し寄せる状況となっている。

(3) 教育支援活動

今年度、第16次隊(2017年8月～9月)と第17次隊(2018年2月)学生隊を現地に派遣し。従来通り、現地住民の生活調査や小学校での交流活動を継続して実施した。これらの活動は、日本からの派遣学生の自立的な国際協力の経験を積むのみならず、現地小学生は、将来の国際交流の貴重な経験でもあり、エコパークを地域共有の開発モデルケースとして自覚するに至っている。そして、これらの活動は現地住民から高評価を得ており、活動中にも熱烈な声援を得ている。協会では、さらなる拡大を目指し、次年度以降の活動を、広く全国の学校に拡大する事を予定している。

(4) 会員増強活動(含むホームページ刷新)

会員増強活動と同時に当協会のイメージアップを目的として、HPやフェイスブック、ツイッターなどでも情報発信を積極的に実施。HPには会員各位の交流や、協会の情報開示が行えるよう工夫を加え、さらに、現地の状況を会員のみならず社会一般にも紹介できるようなコーナーを設け、好評を博している。来年度には、協会事業の拡大にともない、さらなる広報体制の拡充と広報手法の拡大を予定している。

平成30年4月1日から平成31年3月31日

ユネスコによる世界文化遺産プレアビヒア寺院の維持保全にかかわる活動は、世界遺産指定(2008年7月)から10カ年を経過し、アメリカが参道補修への取組みを表明し開始するなど、関係各国の積極的な協力活動が始まった。当協会も2009年4月の設立以来、カンボジア政府と協力し世界文化遺産地域の住民生活の自立に向けた支援活動を継続している。本年度、現地エコビレッジ地区は、幹線道路の拡張が行われ、送電線が配備され、一気に近代化に向かった変化が押し寄せる状況となっている。

本年度の現地活動で特筆すべき事は、乾期灌漑用の大規模配水設備の整備、ビニールハウス方式による農業栽培の試験、エコパーク、および近隣を含む地域の緑化推進などが挙げられるとともに、協会会員有志が現地を訪問し、さまざまな交流が実施されたことにある。以下、具体的な活動状況を報告する。

(1) 植樹活動

今年度が8年目となる植樹活動は、NAPV(National Authority for Preah Vihear)も連携して、エコパーク及び近隣地区の整備にあわせて、将来の地域環境確保を目指し、高木・中木・低木を組み合わせた植樹を推進した。特にエコパークから周囲を結ぶ道路沿いには、ヤシの木を配して、短期間のうちにヤシの木の並木道を実現すべく、村民と共に、植樹活動を実施できた。また、乾期の養生水の大切さを、村民と共に学び、水不足に対応するための、配水施設の整備も実施し、エコパークを中心に活着率の向上に取り組み着実に成果を発揮できるようになってきた。配水設備は樹木のみならず、農作物への適用も可能となり、農業を生活の基盤としてきた地域住民の生活向上にも大きく寄与できるようになった。

(2) 農村支援活動

カンボジア政府から当協会に貸与されているエコパーク(12haの土地)では、地域でのパイ

ロットファームとしての役割を果たすため、オーガニック農業の試行に向け、ニワトリの試験育成と堆肥の確保、乾期の水資源確保のための配水タンクの整備や配水パイプネットワークの整備が進み、安定した農業展開の見通しができつつある。当協会は地域住民(農民)の自立を目指し、新規開拓地域が豊かに暮らせるような農村支援活動を目指しており、その一環として、外務省NGO等活動支援事業の導入検討、JICA草の根事業の導入に向けたJICAとの協議を続け、本格的な活動の基礎を確保するに至った。

(3) 会員増強活動(含むホームページ刷新)

会員増強活動と同時に当協会のイメージアップを目的として、HPやフェイスブック、ツイッターなどでも情報発信を積極的に実施。HPには会員各位の交流や、協会の情報開示が行えるよう工夫を加えるとともに、現地の状況を会員のみならず社会一般にも紹介できるようなコーナーを設け、好評を博している。さらに、協会活動を会員はじめ、広く一般にも伝達できるように、広報誌「プレアビヒア」を企画創刊に向けて推進するとともに、活動報告の冊子も発刊するに至った。

(4) 会員による現地訪問と学校支援

当協会会員が企画して、エコパーク及び学校を訪問して、サッカーボールを40個贈呈するとともに、サッカー教室を開催し、現地の子供たちと、サッカーを通じた交流が行われた。これまでの活動に加え、子供たちと一緒にサッカーボール通じて、お互いの意思疎通が行われ、協会の活動が、より一層村民に行き渡る事となるとともに、日本国内でも、プレアビヒアでのサッカー教室としてニュースとなり、協会の知名度向上にもつながった。

【参考】

協会設立以後、過去10か年の分野別の活動事業費を以下に示します。多くの会員の皆様方からの支援の結果となります。

PVAJ事業費 (H21～H30)

金額単位：千円

年度	遺跡周辺	植樹	農業	観光	教育	広報	小計	管理費	設立費用	計
H21	313	100	100	101	100	595	1,309	305	315	1,929
H22	150	50	219		50	62	531	307		838
H23		100	2,582		513	121	3,316	318		3,634
H24		1,487	517		44	228	2,276	404		2,680
H25		2,453	1,270		677	203	4,603	283		4,886
H26		3,757	1,217		489	124	5,587	331		5,918
H27	946	4,819	218	655	4,186	324	11,148	1,190		12,338
H28	803	1,130	2,215	5,408	522	52	10,130	158		10,288
H29	260	3,126	5,505	347	749	39	10,026	224		10,250
H30	224	2,692	4,740	298	645	39	8,638	538		9,176
計	2,696	19,714	18,583	6,809	7,975	1,787	57,564	4,058	315	61,937
%	4	32	30	11	13	3	93	7		100

PVAJ活動の活動記録 (PVAJ10年史ー作成準備資料より抜粋) (敬称略)

設立関係

- 20.12.12 設立総会
- 20.12.22 東京都事前相談
- 20.12.24 東京都 特定非営利活動法人設立認証届書提出 ・受付
- 21.04.08 東京都 特定非営利活動法人 認証到達日
- 21.04.16 法務局 特定非営利活動法人設立登記申請
- 22.06.28 平成21年度第1期通常総会開催

イベント関係

- 21.03.07 講演会 JICA地球ひろば (広尾)
「アジアカンボジアの新世界遺産プレアビヒア寺院と大自然を考える」
基調講演：カンボジア副首相特別補佐官 UKソメット
パネルディスカッション：JICA広報室長力石寿郎、共同通信遠藤一弥
モデレーター：森田徳忠
共催：JICE、後援：JICA
- 21.03.09 立教大学公開講演会 立教大学池袋キャンパス
「アジア世界遺産プレアビヒア寺院の保存とNGOの役割」
基調講演：UKソメット
パネルディスカッション：森田徳忠、徳川恒昭、遠藤一弥、
モデレーター：伊藤道夫教授
主催：立教大学21世紀社会デザイン研究科
- 21.03.11 講演会 同志社大学
「世界遺産プレアビヒア寺院を語る」 (学生写真展と共に)
基調講演：UKソメット
パネルディスカッション：森田徳忠、遠藤一弥、加藤節夫
司会：阿部茂之教授
- 21.05.08～12 写真展 渋谷電力館
「カンボジア・クメールの地とプレアビヒア寺院」
ゴン・キシヤマと森田徳忠
- 22.06.14 映画会 文京シビックホール 「扉をたたく人」
えん21共催
- 22.10 ウーマンズ・スイミング・フェスティバル (以後5年間継続)
PVAJブースにてリーフレット

22. 12. 04 シンポジウム JICA地球ひろば401号室
現況報告、PV寺院周辺地域開発のためのオリエンテーション・プラン
事業実施計画
23. 05. 24 チャリティ音楽会 銀座王子ホール
出演：井上久美子（ハープ）、銅銀久弥（チェロ）
主催：えん21
チャリティ金を3,111被災者支援団体へ寄贈
23. 11. 25～27 写真展 ギャラリー安樹（駒込）
森田徳忠写真展
24. 05. 29 映画会 文京シビックホール 「レオニー」
共催：えん21
24. 10. 17～22 写真展 那須ギャラリーバーン
森田徳忠「アジアに生きて40年」
トークセッション（森田、加藤）
サクソフオーン演奏会（木村義満）、歌声広場（ウッドペッカーズ）
27. 03. 21 記念シンポジウム JICA地球ひろば
ソメット氏博士号授与、学生隊JICA団体奨励賞受賞
パネルディスカッション：森田徳忠、浅野大介
モデレーター：遠藤一弥
懇親座談会：竹宇治聰子、田辺陽子（司会壽福）

学生隊報告会 各年

設立準備から東京都認証申請まで（H20.08～12）

20. 08. 04 アジア文化会館 伊藤道雄（ACC21代表理事 立教大教授、
春川英樹（行政書士、地球市民財団事務局長）
「NPO立ち上げについて」指導受ける・加藤
20. 08. 14 プレアビヒア寺院訪問（メコン下り）プロジェクト構想説明
森田夫妻、伊奈、平山、加藤夫妻 12名
20. 08. 26
会議 NPO設立準備について・遠藤、角田、加藤
20. 09. 10 PV概要プレゼン 支援依頼
JICE 理事長：松岡和久、専務理事：早瀬隆昌、研究開発副課長：三島宗弘
・森田、加藤

20.09.07伊藤先生からNPO基本的事項指導・加藤

植樹関係指導

JICA地球環境部 三次課長、国際協力専門員 中田博、JICE専務理事 早瀬、
JOFCA加藤研究部長、カンボジア檉尾、オイスカ（事務局長、国際部長）

プロジェクト全般指導

外務省、JICA、JICE、上智大学石澤学長、
・森田、伊奈、加藤

20.09.26

東京都NPO認証手続き依頼 春川行政書士
会議 東京都認証用基本事項について・遠藤、角田、伊奈、加藤、（春川事務所）

郵貯口座開設

「プレアビヘル会設立準備室」

設立寄付金入金

森田、角田、遠藤、伊奈、吉田、田中、熊谷、竹宇治、加藤 9名

20.10.04会議 東京都認証用基本事項について
・遠藤、角田、伊奈、加藤、（春川事務所）

20.10.06

春川氏より定款、趣旨書案提示受ける
着手金支払い

20.10.10 プレアビヒア寺院訪問 アジア4ヶ国参加

20.10.11

ブノンペン会食
カンボジア：ソック・アン副首相、ソメットほか3名
日本：篠原大使、森田、熊谷、加藤
韓国：2名、ネパール：1名、台湾：3名
4ヶ国メンバー 今後の取り組みについて討議

20.12.09 NPO立ち上げ基本案決定

NPO認証前活動のため

1. 任意団体「アジアの誇り・日本プレアビヒア協会」設立
2. 準備室は解散し、任意団体へ引き継ぐ

- 3. 理事を在日の加藤、角田、伊奈、熊谷の4名、幹事田中
- 4. 森田他は設立後臨時総会で就任

20. 12.

発起人10名決定 住民票

20. 12. 12 設立総会

発起人中 9名出席

20. 12. 23

東京都指導を下に定款等最終案検討

法人名を「アジアの誇り・プレアビヒア日本協会」とする

取り敢えず理事長加藤とする

東京都提出書類決定

20. 12. 24 東京都に特定非営利活動法人設立認証届書提出 ・受付

奥村浩司
KOJI OKUMURA

1963年兵庫県神戸市生まれ。

建築インテリアの写真事務所（株）ナカサ&パートナーズ を
経て1996年に独立。有限会社 奥村浩司写真事務所を設立。

現在は株式会社フォワードストロークの代表として、建築・
インテリア・ランドスケープなど空間表現の分野でフォトグラ
ファーとして活躍。

2014年 JAPAN EXPO フランス・パリ開催「WABI-SABI」にて、日本建築の奥深さを表現した
作品を出展。

2018年 カンボジア プレアビヒア寺院 世界遺産登録10周年に合わせ写真展を開催
APA 日本広告写真家協会・JAPS日本建築写真家協会 正会員。



皆さまのご支援に対する感謝の気持ちを込めて

メコン諸国の近代史を中学校の教科書風にまとめれば、フランスによる植民地支配、第二次世界大戦とその後40年にも及ぶインドシナ戦争を経て、ようやく“自由への道”を手に入れたのです、ということになります。その形を整えたのが1991年10月にパリで行われたカンボジア和平協定の調印であったと私は理解しております。ただその中であってカンボジアが真の平和を取り戻すことが出来る条件が整うまでには、さらに戦い続けなければならなかった。タイとの国境線に立こもって抵抗を続けてきたポルポト軍が完全に消滅した1998年、つまりクメールの国カンボジアが新たな国造りに向けて再スタートを切った時です。それから未だ20年、これからですね、というのが私の見たカンボジアです。



一方ポルポト軍との激戦地の一つであったこの地に、当プレアビヒア日本協会の活動がスタートしたのが10年前。プレアビヒア寺院がUNESCOの世界遺産として認定され、また寺院の帰属をめぐるタイとの間での軍事摩擦間が生じたのもこの頃です。その後タイとの関係が漸次修復されたことに伴い、現在はUNESCO加盟国の間で、寺院の修復に直接携わる国の役割分担が漸次決められつつあります。ゆっくりではありますが前に進んでいます。インドや中国と並んでアメリカもその一翼を担う。予想を超えた構図です。一方では、（州内にある）コウケイ寺院のUNESCO世界遺産中の準最終準備が進められていますが、これも明るいニュースです。当会についていえば、会員の皆様からのご寄付に加え、これまでに活用してきた環境関連の資金の他に、現在日本政府による農業開発関連の資金申請に向けての準備が完了したところで、ようやく前に進むことが出来る環境が整いつつある、今そういう段階にたどり着きました。これも皆さまからのご支援のたまものです。

カンボジアの近代史は植民地時代から、インドシナ戦争とそのあおりによる内戦へと、大国の思惑とその影響下に置かれた時代とも言えます。その中でプレアビヒアは寺院のみならずそのおかれた地理的な条件によって特に厳しい時を経験した地域の一つです。クメールの文化の結晶でもある遺跡群が州内には多数あります。これらを分解してみれば、その核と分子とになっているのは、これを造り、練り上げてきた人達の知恵であり、技であり、執念、言い換えれば魂の集積みたいなものでしょうか。大げさに言えば、長い歴史の中でこういった大切なものがいつの間にか地面とジャングルの中にうずもれていく時に、アンコールワットを救い、更にこの努力がプレアビヒア寺院にまで及んだ。そういった時に幸いにも（かつてポルポト軍の要害の一つだった）プレアビヒアの地にも人々が少しずつ移り住んできた。そしてその子供達が今エコビレッジの中核となる“若い世代”に育ちつつあります。彼らに必要なのは知恵だけではない、郷土愛や村を盛り上げていくための経験・自信・信念、そしてそれを支えていく周りからのサポートが必要です。それを皆さまがして下さっている。

当協会設立の趣意書はそのまま設立協定書の中に組み込まれています。そしてその中核を

なすのはこの社会の“平和と安定”です。それがかなうためには農業を中心とした村の生活基盤とコミュニティの構築を着実に進めていくことが必要です。その先にある階段を一段ずつ登っていくための人材の育成は、村の成長のためだけではなく、さらに“プリアビヒア寺院の繁栄”をサポート役としての期待に応えていくための土台となります。これが成った時に文字どおり“神様の寺院”でありこの地域の平和の象徴としてのプリアビヒア寺院の繁栄が見えてくる。というのがこのプロジェクトの特殊性であり、私たちのやり街とも言えます。私個人の経験で申訳ありませんが、寺院の向こう、タイ側から地雷除去にたずさわった頃、カンボジア側の兵舎に寝泊まりしていた頃、そして撤兵式をカンボジア側から見ていたことなどを併せて思い出すにつけて、文化と歴史を守ることの大切さを感じます。

そして寺院と村が完全に一体となった時にこのプロジェクトは完成します。そしてタイ側とプリアビヒア側の往来が自由になった時に初めて寺院は元のプリアビヒア寺院の役目、つまり国境を超えた存在に戻ります。ただ我々の役目はそこに到達するずっと前に終わっている。しかし村人達が自らの手だけでやれるようになるのにはもうすこし時間が必要です。また一つ一つのプロセスの中にも区切りがあります。その合間に出来る限り皆さまにプリアビヒアにおいていただき、プロジェクトをご覧頂き、そして若い世代に接していただければ幸いです。村の人達にとっても励ましになります。今後ともよろしく申し上げる次第です。

2019.09.30

アジアの誇り・プレアピヒア日本協会が発足して10年を迎え、その間、現地では多くの出来事を乗り越え、今、ようやく開発発展のドアが開きはじめました。この間、協会の支援は、多くの村人たちの励みとなり、農業生産に励む方々、英語教育に熱心に参加される方々、観光開発に期待を寄せられる人々、皆様の輝く笑顔が協会の活動の源泉となっております。



わたくしどもの活動も村の人たちと共に、新しい扉の向こう側に向かって動き出しております。

会員の皆様方からの貴重なご寄付、日本政府の支援、日本の企業からの支援などが、少しずつ動き始めました。私たちの、わずかばかりの支援が、現地の皆様の、カンボジアの方々の未来につながることを願っております。

経歴

1951年北海道生まれ

1975年より大手建設コンサルタント会社にて水資源分野の専門家としてコンサルティングエンジニアとして国内外の河川、水資源分野の企画開発を担当

2005年より武蔵工業大学（現東京都市大学）都市工学科にて水文学・河川工学担当

2016年より東京都市大学大学院客員教授、建設マネジメント講座担当

（社会活動）

水文水資源学会理事・国際委員長、土木学会情報委員会副委員長、国際水文科学協会（IAHS）都市水管理委員会アジア地域委員、世界水フォーラム日本選出理事、アジア河川再生ネットワーク理事等を担当。技術士、博士（工学）



「PVAJ10周年記念講演会」 ～プレアビヒアの今までとこれから

2019年10月5日(土曜日) 13:00～16:30

於：JICA地球ひろば(東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5)

主催：特定非営利活動法人 アジアの誇り・プレアビヒア日本協会

共催：一般社団法人 日本旅行作家協会 カンボジアグループ

後援：一般社団法人 日本旅行作家協会

後援：JICA地球ひろば